



画家の肖像 増補改訂版
伊野孝行

Ino Takayuki Portraits of Painters

8887ウクス

『画家の肖像 増補改訂版』
のデザイン

A4変型／上製
8887ウクス／2025年4月刊

画家の肖像 増補改訂版 Ⅰ
思い出のクリフオーブ 9

日誌書 9

メモランダム・
本のデザイン 10

N'S COLUMN 11

魚の環世界 12

付録

トキドキ漫画

MY KID'S DIARY

Originally
August 2025

オリジナル

初版より大幅にページ数が増え、登場する画家も絵の点数も増えました。台割（絵の順番）は、伊野さんと一緒に、サムネイルを切り貼りして相談。伊野さんの自画像も5点収録。画家の名前は、初版時には欧文表記のみでしたが、今回は日本語表記も入れました。

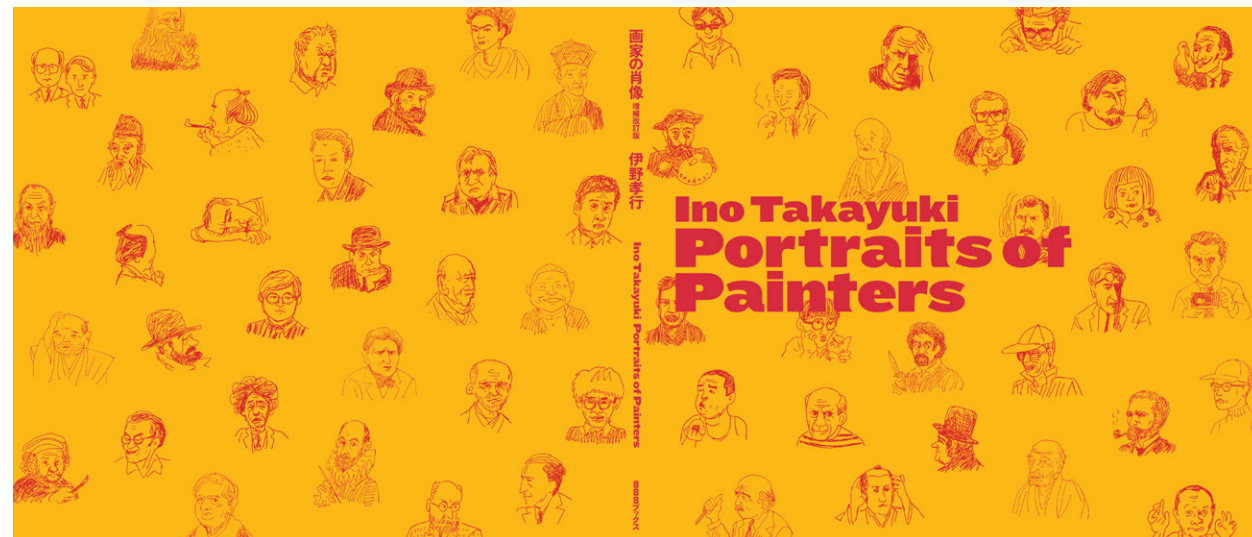
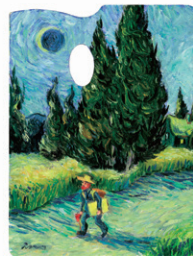
上 カバーと帯
下 表紙



画家の肖像 増補改訂版
伊野孝行
**Ino Takayuki
Portraits of
Painters**



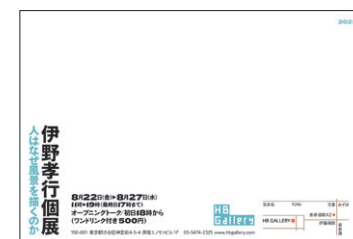
ISBN 978-4-908439-30-8
C0070 R30006
定価 本体3,300円
（送料3,000円＋税10%）
発行：888フックス



2012年の初版『画家の肖像』はソフトカバー。今回の増補改訂版はハードカバー。カバーの表1の絵を変え、初版とはまったく違う印象に。タイトルは編集者の希望で欧文をメインにして大きく。表紙は全体に、登場する画家の全員の似顔絵。（伊野さん本人もこっそり）

8月の伊野孝行さんの個展です

伊野孝行個展
「人はなぜ風景を描くのか」
表参道・HBギャラリー
2025年8月22日（金）～8月27日（水）
11～19時（最終日17時まで）





自画像 画家が描く自分の肖像画。自画像は、画家の自己表現の手段として、重要な役割を果たしている。自画像は、画家の個性や感情、そしてその時代の背景を反映している。自画像は、画家の自己認識や自己表現の手段として、重要な役割を果たしている。自画像は、画家の個性や感情、そしてその時代の背景を反映している。

フリーダ・カロー
Frida Kahlo



Hans Memling

誰

でも写真をあつかえるようになって肖像画は流行らなくなった。ゴッホは肖像画の最後の時代に絵を描いたのかもしれない。終わってしまったかに見えた肖像画を復活させたのはホックニーだろうか。

ゴッホが描いたタンギー爺さんも、郵便配達夫フルランも、ガシエ医師も無名の人物だ。ホックニーも両親や友達や恋人を描いている。肖像画の面白さは描かれた人の有名無名とは関係ない。

イラストレーターの職業病か、誰だかわからない肖像画を描いて面白がってもらえる自信はない。似顔絵の仕事はよく頼まれる。似顔絵はよく知ってる顔が絵になっているから面白いので、肖像画を鑑賞するのとはちよつと違う。また画力のある人が必ずしも似顔絵がうまいわけではない。王侯貴族の肖像画を描いた宮廷画家の苦勞もしのばれる。肖像画はお見合い写真の代わりもしたはずだ。

自分の手柄にしたいのでいつもは言っていないが「画家の肖像」のきっかけは日下さんだった。

2009年の1月、ロンドンに行った。大規模なゴッホ展が開かれるというのでビッグラフィックスの社員旅行に便乗したのだ。着いて2日目の晩、お好み焼き「あべの」

肖像画は おわらない

伊野孝行

で日下さんにいきなり説教をくらった。その年の12月に予定していた個展のテーマについて話しているうちに「そんなもんやって何がおもしろいねん!」と怒らせてしまった。事務所のスタッフは社長の手前、私に助け船を出すことはできない。重い空気の中、私の食べのこしたお好み焼きは鉄板の上で真っ黒に焦がていた。

「ロンドンでは本当にいやな思いをさせてすみませんでした。私はあの時、伊野くんの才能をひらかせたくて必死でした。真面目すぎるのですね」当時を振り返って日下さんはそう言う。

大竹伸朗さんはジャコメッティの彫刻を見たとき涙が止まらなかったらしい。自分にそんな経験はない、浅いなあ。ところがロンドンでゴッホを見たら涙が溢れてきた。日下さんに痛めつけられて心が弱っていたことが原因だと思う。そのち何度でもゴッホの絵を見たが涙が流れたことはない。

旅行が終わり、に近づいた頃、日下さんは



巻末に5頁で、初版時は折込みの画家のプロフィール



Hans Memling

増補改定版 あとがき 伊野孝行

「今度の個展は画家たちの肖像画を描いたらどう?」と提案してきた。この場合どちらの立場が強いかわかりだろうか? それは私なのである。受け入れるかどうかは私にかかっている。

こうして私は「画家の肖像」シリーズを描きはじめた。最初は「これっていわゆるパロディじゃないだろうか」という思いが頭から離れなかった。パロディは昔流行りすぎて廃れたものだった。言いかえれば、画家たちの肖像画を描くことが、自分に何をもちたしてくれるかまだ自覚していなかった。作品を描いた後に試みを理論化することはできるが、描いている途中はよくわからないものだ。

最近『ホックニーが語るホックニー』という本を読み返していたら「いい絵を作るにはある主題と多少の様式が必要だ」と書いてあった。様式は多少、というところがミソである。様式にばかり重点を置く同時代の美術に対する反論だ。

画家たちの肖像画を描く。それぞれの画家には内容と様式がある。最初から2つのものが用意されているわけである。それらをどう受け止めて絵を作り出すか。様式を取り入れてどう抜け出すか。ホックニーの本を読んで今さらながら「画家の肖像」を描く意味を理解したのであった。

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』、南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』などがある。テレビアニメに「オトナの一休さん」。

増補改定版のあとがきは、伊野さんの自画像



吊 るした切りかけの「鮭」の絵で知られる日本初のリアリズム画家・高橋由一の「自画像」に、まぶびっくり。つぎの瞬間、つい笑ってしまった。

由一の「自画像」は伊野孝行君が描いた。頭にちょんまげを載せて虚空を見つめる真面目で一途な高橋由一の脇に、鮭のしっぽが見えている。手前のまな板の上には、油揚げ、焼き豆腐、豆腐がある。今夜の献立を考えているように見えないこともないが、羽織姿が異質だ。

「油絵の写実性に人生を賭けた由一」（伊野孝行『画家の肖像』）が食材を描いたのは、オランダの静物画に「台所画」というジャンルがあったからではないか、と伊野君はいう。それでいて「絵が西洋の模倣に終わらなかつたのは江戸人の気骨だ」。そうか。

二〇二五年四月初め、南青山の画廊

SPACE・YUで開かれた「南伸坊＋伊野孝行」展を見に行った。一九四七年生まれの南さんは伊野君の二回りも年上なのに、呼吸が合う。年寄りぶらず、若ぶらない。ふたりのイラストレーターが洋の東西と時代を超えて、それぞれ好きな画家の「肖像」を描いた。会場は、よい関係のふたりが醸し出した明るい空気に満たされた。

西洋絵画に自画像が多いのは、「自意識」が誇りと苦しみのみなもどったからだろう。一方、日本美術に「自画像」の伝統はない。日本では万物が描かれても、絵描き自身は対象にならない。作品は大切でも、絵描きその人は大切ではない。だいいち絵描きの自画像を注文してくれる人はいない。

陰影のつけ方がヘンで、額が凹んでいる見



二回り違いのイラストレーター二人①

関川夏央

南伸坊 × 伊野孝行 ぼくらの好きな画家

2025年3月31日(月)～4月12日(土)
東京青山・スペースユイ

マルセル・デュシャンは、男性用小便器に「泉」というタイトルをつけ、臆面なく「作品」として展示した人だ。フランソワ・トリュフォーが、三角関係の記憶を核に戦間期を郷愁した映画『突然炎のごとく』のモデルのひとつであったデュシャンだが、人を驚かせ、笑わせるのも好きだった。

えるのは由一のオリジナルとおなじだが、伊野君が「自画像」と「台所画」を再構成したこの絵が、ネットでは高橋由一の作品として掲載されているという。今の世の中、私にはわからないことが多い。

画家のプロフィールはB4判を四折りにして、折込み・レトロ印刷。



初版では和文タイトルを大きく、欧文タイトルは小さい。



『画家の肖像』初版
A4変型／並製
ハモニカブックス／2012年刊



森英二郎 思い出のクリフォード②②

ぼくにとっての大瀧詠一といえぱやっぱり大ヒットアルバム「A LONG VACATION」である。太陽が眩しい永井博のジャケット・イラストレーション、大瀧詠一のハッピーなメロディーと優しいヴォーカル、松本隆の洒落た歌詩、もう完璧である。なかでも特に好きなのは、♪思い出はモノクローム色をつけてくれ、と歌われる「君は天然色」という曲です。昔のガールフレンドのことを思い出したりして胸がキュンとなります。しかし本当は松本隆が大好きだった妹さんが亡くなった悲しみの中で書かれた失恋の歌のようです。そう思って聴くと大瀧詠一の歌がどこか寂しそうに聞こえる。

大瀧詠一を一度だけ見たことがあります。1972年大阪の天王寺野外音楽堂であった春一番コンサートの「はっぴいえんど」です。

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎著）、絵本『おとうさんのうまれたうみへのまちへ』など。



大瀧詠一 Ohtaki Eiichi
1948-2013

おおにし・よしか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店 London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

日日読書 大西良貴

36

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

億劫がって就職活動せぬまま大学を卒業、一人暮らしがしてみたく、東京高円寺の風呂なしアパートに住んだ。と言っても何も当てはなく、たまに日雇いのバイトをする他は、本を読むか映画を観るかの日々。特に、京都の端の方ではあり得ぬ映画館とレンタルビデオ店の多さから、浴びるほど映画を観た。

そんな東京時代に、よく持ち歩いていたほど熟読したのが本書。「映画愛」という言葉を唾棄し、映画は暗い思い出の対象だと言ってはばからない著者の鬱屈が込められ、メジャー作よりもヒト癖もフタ癖もある異色作を多く取り上げた本書は、将来の目途が立たぬまま平日昼間から一人映画館の暗闇に身を浸す後ろ暗い気分になっした。周りの人が知らない映画を観ることに内心大得意になっていた若さにも。本書で取り上げられていて感銘を受けた映画は、クローネンバーク、ブニエルの諸作や、『乙女の祈り』『誘う女』『東京フィスト』等々。

が、必然のなりゆきとして貯金が見るみる減り、マズイ……と思い始めたら、父急死。半年で実家に舞い戻ることとは相成った。



柳下毅一郎
『愛は死より冷たい
映画嫌いのための映画の本』
洋泉社／1998年

そのデュシャンを伊野孝行は、強い尿意に階段を駆け下りて「泉」に向かう連続する「肖像」を描いた。階段一段ごとに切迫合いは増す。

デュシャンの肖像はもう一枚ある。それは、デュシャンとマン・レイが日本間で正座して将棋を指している絵だ。デュシャンにはチェスばかりしていた時期があった。マグリットと頭にバゲットを載せたダリが、ゆがんだ時計で時間係をつとめながら、やはり正座して観戦している。

「現代美術は大掛かりな一コマ漫画のようなもので、難しく考えなくていいと思う」「僕は授業中のらくがきからキャリアを出発させた。今も落書きの延長でありたい。『画の肖像』の絵も一種の二コマ漫画と考えれば彼らと同じ道かもしれない」

「彼ら」とは、デュシャンやウォーホル、ダミアン・ハーストや草間彌生など、伊野君とは「道を異にする人たち」とその仕事だが、「何か新しいたずらをして、人を驚かせてみたい」と明るく言い放つ伊野君は、生まれながらのイラストレーターというべきであろう。

〈次号につづく〉



上2点 右頁上『画家の肖像』より
(ほか2点 二人展の会場写真)

彼は『画家の肖像』にこう書いている。



せきかわ なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峽を越えたホームラン』（双葉社、第7回講談社ノンフィクション賞）『坊っちゃん』の時代』双葉社／各ジョーと共作・第2回手塚治虫文化賞。最新刊は本書連載「昭和残照」が元になった『昭和的』（春陽堂書店）。

「津野」

海太郎に連れられて初めて晶文社に行ったときにね、だからまだ高島屋の宣伝部にいたころですよ、亡くなった小野二郎さんがね、自分で一生懸命に線ひいてこの本のデザインしてたわけ。(注・『近代日本文学史の構想』1964年11月) それでね、見るに見かねて「わたしがお手伝いしましょうか」といってやらせてもらったのが、この本なんです。だから小野さんとの「共作」ということになるのかな。

だから正確な意味での最初の装幀というのは『ウェスカー三部作』ですね。だけどこれには裏話があつてね、晶文社じゃこれを別のデザイナーに頼むはずだったんですが、ところが、たまたまわたしがその依頼の場において、「こういうものは横判の横組みでやりたい」というそのデザイン先行型のデザイナーと、かなり激しい議論になったわけ。ケンカみたいになっちゃった。それでどうとうぼくがやることになったんです。わたしは新聞の紙面のような上りにしたいという気持ちだったんですね。つまり何て言うか……、スピード感ですね。おさまり返った本というのじゃない。なにしろ1色刷りでしたから。』『平野甲賀 装幀の本』1985年／リブポート

見つけました。本棚の奥にありました。すみません。前回に掲載した図版は『ウェ

ロス

近郊の山火事でYOSHIIKIが被災したと聞いて、人気ミュージシャンの印税収入の威力に感じ入った。JASRACは偉大なり！

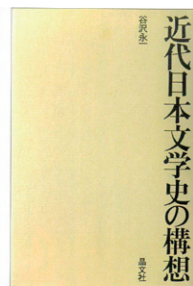
しがない脚本家にも著作権収入はある。近年は長期凋落傾向のテレビ局が番組販売に熱心なので、ドラマの再放送でおこぼれにあずかる。NHKは再放送の日時をきちんと連絡してくれる、それも未だにファックスで。

小松左京が作家ではいち早くファックスミリを取りつけた。編集者高橋一清は、当時文藝春秋社商品部に一台だけあったファックスミリで小松の原稿を受けた。それまで小松は大阪箕面の自宅からタクシーで伊丹空港へ行き、航空便で原稿を送っていた。まだファックスの送受信に時間がかかったので、タクシード代より電話代の方が高かったとか。僕も大阪在住の頃、書いた脚本を新大阪駅で新幹線便に乗せていた。相手は東京駅で受け取るメールで印刷所へ直接入稿する今は、隔世の感がありますねえ。

高橋一清『編集者魂』（青志社）には随所に、原稿をめぐる逸話が記されている。

立原正秋は原稿が出来ると自宅に高橋を呼び、目の前で読ませる。読了後祝杯を挙げる。下戸の高橋も付き合う。帰路、肌着とシャツの間に原稿の入った封筒を収める。酔いで電車で居眠ってしまうが、原稿は文字通り肌身離さずだ。

近代日本文学史の構想



『平野甲賀 装幀の本』 図版ページの冒頭に最初の装幀3冊がある

メモランダム・本のデザイン 30

ウェスカー三部作 その2 日下潤一

スカー三部作』ではありませんでした。親しい編集者のYさんが指摘してくれました。私が『ウェスカー全作品』の三冊のデザインが好きで早とちりしました。『ウェスカー三部作』と『全作品1』は、64年の12月1日に同時刊行されています。

デザインし直したのでしょうか。『三部作』は並製の雁垂れ(表紙に袖をつけて折り込む)で、パラフィン紙のカバー付き。スミ1色。『全作品』はカバー装の上製。いずれも四六判。デザインは同じスタイル。表をタイトルの白のスペースと図版とでふたつに割る。図版は横倒し。この右のタイトルスペースは、強く、印象的で、しばらく晶文社の本のデザインを象徴する。(つづく)

有馬頼義の三百枚の長篇が間に合わず、梶山季之が代打に立つ。校了まで一週間！ 梶山は旅館に籠り部屋の窓を開け放って十二月の冷氣の中、手あぶりの火鉢ひとつで二日半寝ずに書き上げた。高橋は梶山から原稿を渡される度に何度も印刷所へ走り、掲載にこぎつけた。

売れっ子松本清張と挿し絵の岩田専太郎の現場も激しい。週刊誌の連載小説『西海道談綺』で当時七十二歳の岩田に、毎週十時に清張の原稿を届ける約束だった。しかし何度も遅れ岩田がキレた。江戸っ子の啖呵が飛ぶ。

高橋はひたすらお願いするしかない。岩田はその連載途中に急死する。葬儀会場の隅に(岩田の寿命を縮めたと思っただか)喪服の清張がいた。高橋は挿し絵画家の交替を伝え、「先生、明日が締め切りですよ」と清張に念を押すのを忘れなかった。

『岬』をめぐる中上健次と高橋の攻防を知りたかった。高橋は文藝春秋に入社してすぐ新鋭の中間に「文学界」の巻頭詩を依頼する。高橋二十二歳、中上二十歳。兄弟のような関

係だった。それから中上は高橋にせつせと小説を送る。他誌で何か作品が掲載された後、高橋の所に『岬』が届く。「すごい！ これはいける」と読みながら何度も呟いた。それから都合九回、中上に手直しを求めた。ヘミングウェイは『老人と海』を二百回以上読み直した、トルストイは『戦争と平和』を七回、全文書き直したと高橋は中上に話した。『岬』の出版直後、和歌山新宮で文藝春秋の講演会があり、高橋は帰郷していた中上と会う。中上の故郷でボートレイトが撮りたかった。

中上の案内で小高い丹鶴城址にのぼる。中上は眼下の新宮の町を見下ろして呟く。

「この町を焼き滅ぼしてやりたいと思うことがある」

読了してからその古本が贈呈本だったと気づいた。高橋の署名と印、そして表題の言葉があった。遠くを見つめる高橋一清の気構えに打たれる。

N'S COLUMN

41

西岡琢也 百年後の心田を耕す

にしおかたくや 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO(刺青)』あり『沈まぬ太陽』『はやぶさ〜遙かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。2026年『幕末ヒボクラテス』公開予定。



織田邸・書斎

ウンベルト Umwelt Textiles & Objects
604-0962 京都市中京区夷川通
御幸町西入達磨町588-1

うずみ・やすこ

1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

息子の夏休みが始まってすぐに、長崎へ帰省。朝は蝉の声を聞き、市民プールの流れるプールに流されながら空の鷹を眺め、夜は庭で花火をした。約30年ぶりに「長崎ペンギン水族館」に。世界に生息するペンギン18種類のうち9種のペンギンを飼育し、6種の繁殖に成功している。水族館と砂浜が繋がっていて、砂浜を自由に散歩するペンギンを見ることもできる。飼育員さんに見守られながら歩く小さなペンギンは、たのしそうに見える。さまざまな費用の高騰により、来年から入場料をアップするお知らせが掲示されていた。イルカショーもアシカショーも無い小さな水族館だけど、永く永く続いてほしい水族館だ。(赤波江)

2025年8月15日発行 <ロゴデザイン>ヨコカク <編集・デザイン>赤波江春奈+日下潤一 <印刷・製本>グラフィック
<発行>ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2025, Printed in Japan 【無断転載禁止】 お問い合わせ=akabae@bgx.jp

◆Web = bgx.jp ◆Twitter & Instagram = @bgx_book_design ◆日下潤一のプログ = www.bgx.jp/blog/
「オリジナリ」はBGXが毎月発行するフリーペーパー／100部発行

◆ロンドンブックス(京都・嵐山) ウンベルト(京都・夷川) フラヌール書店(東京・不動前)に10部ずつ、
古瀬川珈琲店(東京・神保町)に5部、置いてます

Life with Chairs 椅子と人生 part.1

Last chanceは春が来るまで。二月初旬、降り立った旭川空港は一面の雪景色でした。

私にとって初めての北海道。旅の目的は、椅子研究家でありモダンデザインのコレクター織田憲嗣先生(1946-)のご自宅探訪でした。先生は啓子夫人と共に旭川空港のすぐそばにお住まいで、すべてのコレクションを東川という町に寄贈されています。その寄贈が三月末に完了すること、そして秋には引越されるという話をとお電話でうかがっていたので、今しかないと思い、どきどきしながらお邪魔しました。奇しくも寒波とともに。

先生自ら設計されたご自宅は、広大な森の中にひっそりと建っていました。「ここにはいろんな鳥たち、エゾキウサギやエゾリス、春には鹿もやってくるんですよ」とのこと。「胡桃を剥いて渡してやると、こうやって食べるんです」と見せてくださったのは食事中的エゾリスの画像で、ふいに頭に浮かんだのはドリトル先生の姿でした。

多岐に渡る織田コレクションの中でも、住まいに置かれているのは特に思い入れのある家具類のようでした。書斎や地下の倉庫までゆくりとご案内いただいたあと、リビングのテーブルに着きお話を伺いました。

1980年代当時、デンマーク国内でほとんど顧みられていなかったFinn Juhl(フィン・ユール/1912-1989)やHans J. Wegner(ハンス・ウェグナー/1914-2007)の家具(また関連書籍や雑誌類も)を発見し、苦心しつつ集めて来られたこと。そして彼らと実際に始まった交流、それぞれの自邸を訪れたエピソードも。

「自分はデンマークで落穂拾いをしてきたんだ」と、ぽつりとおっしゃった言葉がとても印象に残っています。〈つづく〉

7月13日、京都国際マンガミュージアムのシンポジウム「村上知彦のいない日々のために」に行く。昨年12月、10年間の闘病の末に亡くなった村上知彦が、その間に自身の膨大な資料を、ミュージアムのスタッフと共に時間をかけて整理し同館に寄贈。そのことを聞きたくてでかけた。村上が関西に戻ってから2000年以降、マンガミュージアムにアドバイスしたり、日本マンガ学会の学会誌の編集長をしたことなど、知らなかった。森英二郎さんが「よみうりカルチャー錦糸町」で7月から版画教室を始めた。月3回土曜日。この機会に2002年の『絵本・木版画の作り方』をカラーで作り直しました。詳しくは森さんのFBで。(日下)

今月のあとがき

Originally
August 2025

オリジナリ
39



E.Mori

息子は、猫アレルギーだ。猫だけではなく、犬もハウスダストもダニも花粉も。夫も同様に、たくさんのアレルギー持ちである。

なのには猫が2匹。16歳の白いオス・シロー、10歳の三毛のメス・ざくろ。わたしは上京してすぐにシローを飼い始め、結婚した年にざくろが増えて、2匹になった。

猫アレルギーの人間が2人と、猫2匹、そしてわたし。5つの生き物がひとつの屋根の下にいた。

そして先月、シローが死んだ。

6月に肺が悪いと分かって、あっという間に逝ってしまった。ちょっとせっかちすぎるでしょう、もう少し、看病も介護もさせてほしかった。

あーあ、猫の言葉が人間に分かったらよかったのに。そう嘆くわたしに、息子は返す。「まあ、ぼくは、シローが何言ってるかちゃんと分かってたけどね」。ほんまかいな。

火葬の前の晩、棺になにか入れてあげようと息子と相談する。

「手紙はどう？」

「手紙書いたってシローは読めないじゃん」

「プラスチックのおもちゃは入れちゃダメだって」

「じゃあ、紙で作った猫ならいいかな？」

赤波江春奈
かたちがなくなる

my kid's diary

13

そういうわけで、画用紙と折り紙で「猫のともだち」を作ることにした。途中からそれは、もう1匹の猫、ざくろの分身ということになった。

「ちょっとざくろ、動かないでじっとしてて！」とざくろを叱りながら観察し、複雑な三毛の柄を、茶色と黒の折り紙を切り貼りして作る。うしろ足の裏側に、マジックで、大きくハッキリ「ざくろのぶんしん」と書く。

わたしも息子も完成品にととても満足し、明日シローと一緒に灰になっちゃうからね、と言って何枚も写真を撮った。「ざくろのぶんしん」はシローの身体に寄り添うようにして棺に入れた。

シローっておもしろい猫だったよね。ね、シローがいて、毎日おもしろかったね。家族でそう言

1 かみを切る

3 もようをつける

シローはこんな模様だった

2 パーツをつくる

足をおれば自立する

って、シローの固くなった身体を何度も撫でた。そんな、弔いの夜だった。

火葬が終わり、小さい骨壺と一緒に家に帰る。家の中に一歩足を踏み入れた時に、ふっと息子が言う。「かたちがなくなると、ほんとうに、もういないね」。

同じこと、わたしも思っていた。

受け入れがたい真実を、あつけらかんと明るいい声で言葉にされて、ちょっと笑ってしまう。

「シローのかたち、もう無いね」「まだ家の中にいる気がするけど、やっぱりいないね」「シロー、どこにもいないね」そうやって、言葉にする。

小さくて大きな不在を埋めるため、確認するために、まじないのように何度も言う。